

ゴクラクツウシン UBUD

vol.16



U・B・U・D I・N・D・A・H



photo:YHori

バリで何が好きかと言われれば、好きなものはいろいろあるわけだが、実はバラガンジュールが音楽部門では上位を占めるくらい好きである。何らかの祝い事や祭事で道を練り歩きながら演奏されるバラガンジュールは、あの強烈なビートのガムランをさらに迫力だけ取り出したようなノリのいいものである。

この音が聞こえてくると、何はさておきヘラヘラと後をついていってしまうのである。当然その先には何らかの祭事があるわけで、これも楽しめてしまうわけだが、あの強烈な手持ちチェンチェンのかき鳴らす「ジャンジャカジャン！」という音に酔いながらジャムセッションのような即興とも思える演奏に盛り上がる奏者たちを見ていると、自分もやってみたいと思うわけである。セットを買って東京に持ち帰り、チームを結成してやろうなどと真剣に考えたりもするのだが、練習する段階から苦情が殺到するであろうことから未だ実行できずにいる。あの音は東京の住宅街ではなかなか認めてもらえないかもしれない。

堀 祐一

Contents

● Kabar Baru Berita Lama

D・マハルティカ永眠	4
祝い／ブランコ家&バリ州知事家	5
バリ島在住の日本人は今…?	6
DADONG (ダドン)	7

● Culture Shock

オダラン体験	8
--------	---

● C・O・L・U・M・N

ガムラン奏者ワヤンの独白	10
--------------	----

● Dari Jepang

テンペブーム到来か?	12
------------	----

● KOMISI

コミシ	13
-----	----

● BALI/Timur

バリ島・最東端の旅	14
-----------	----

● Lancong Lancong Bali/3

ランチョンランチョンバリ／3	15
----------------	----

● Pondok Manis 私の常宿

ARTINI 3	21
----------	----

● Pesan & Kesan

旅人一声	21
------	----

● Apa Itu?

これなあ〜んだ?	22
----------	----

● Peliharalah Lingkungan UBUD

Ubud の環境を考える	22
--------------	----

● Berita Terbaru

その他のニュース	23
----------	----

● Orang-orang Ubud

うぶんな人々	25
--------	----

● Pengumuman

でんごんぼん	26
--------	----

○表紙のことは○

堀さんにすすめられて表紙を描かせてもらいました。僕は「南国美人画」という言葉が気に入っている。「ポイントキラキラ輝く瞳」にあります。バリ、インドネシアで何度もこういう忘れられない瞳を見た。他の作品は僕のホームページの「南国美人ギャラリー」に20枚以上飾ってあるので、興味のある方は <http://www.bekkoame.or.jp/~sch0155/> に来てみて下さい。メールもくれると嬉しいです。

細田 寛

編集室便り

●入稿に関するお願い

編集部では、Macintosh による DTP 作業で版下を作成しています。原稿をお寄せくださる方で Text Data で入稿可能な方は、以下の方法をお願いします。

☐ Macintosh フォーマットの FD (Text Data)

☐ Dos フォーマット (2DD-720KB) の FD (Text Data)

☐ E-Mail :

MHC03202: 菅原 (NiftyServe)

GCB01162: 堀 (NiftyServe)

hori@potomak.com (Internet)

eriko@potomak.com (Internet)

※詳細は、裏表紙にある日本連絡先事務所までお問い合わせください。

クビヤール・トロンポンの名手

D・マハルディカ永眠



クビヤール・トロンポンを踊らせたなら艶やかな華の如く、チャロラン劇では老婆の魔女役で名演技、そして、ラーマヤナのラクシュマナ役もぴったりのキャラクター、デワ・マハルディカ。UBUDが生んだ、バリ・ダンサーのスターの一人。

悲しいニュースをお伝えしなくてはなりません。彼は9月13日、深夜3:00、デンパサールの病院で、永遠にこの世に別れを告げてしまったのです。詳しい病名はわかりませんが、今年4月のスマラ・ラティの日本公演から帰国してまもなく体調を崩したまま、ついに帰らぬ人となりました。

彼が踊るクビヤール・トロンポンを毎週のように観て、道で出会えば優雅な身のこなしで手を振ってくれるデワ・マハルディカを、とても身近に感じていた極通スタッフは大ショック。「まさか…」と、今でも信じられない思いです。

9月26日：火葬式であるブレボンの行列は、パダン・テガル、ジャラン・ハヌマンのなかほどにある彼の家の前から始まりました。厚い陽射しがちょうど頭上にあがった頃、遺体を収めたパデとルンブー（張り子の黒い牛）が、スマラ・ラティのメンバーによるバレ・ガンジュールの響きとともに火葬場へと行進しました。パデには彼のクビヤール・トロンポンを踊る姿の写真が飾られ哀傷を誘う。そして行列は、クトゥに入る道に掲げられたスマラ・ラティの看板の前を通り過ぎ、プラ・ダラム・プリへと向かったのです。

彼のあのセクシーで華麗な踊りは、もう二度と観ることはできません。でも、彼はずっと私たちの心のなかで生き続けることでしょう。心から、心から、ご冥福を祈りたいと思います。



クトゥのスマラ・ラティ公演会場前を通過



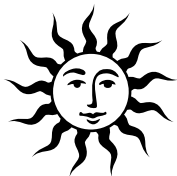
パデに飾られたマハルディカの写真

アントニオ・ブランコ家とバリ州知事家 おめでとうございます。

UBUD にすむスペイン人画家、アントニオ・ブランコ氏のご令嬢、マハデウィ・ブランコさんが、このたび結婚しました。お相手はなんとバリ州知事・イダ・バグース・オカ氏のご息、通称グス・ビムさん。ブランコ氏の奥さんはバリ人で、お二人のあいだのご子息、ご令嬢は美形揃いで有名。

新聞「Bali post」によると、お二人のお付き合いは両家公認のもとに5年前から続いていたそうです。が、一年前にイダ・バグース家がブランコ氏に結婚の申し込みをしたところ、すでに断られたことがあるそうです。当然 OK をもらえと思っていたイダ・バグース家は予想外のブランコ氏の反対にあって当惑。その時のブランコ氏の言い分は「申し訳ないが、今回はまだ許すわけにはいかない。マハデウィは、今の私にとって大切な Bungan Natah (バリ語で一番美しい娘の意) なのだ」。ブランコ夫妻にとってマハデウィさんは、特に自慢の愛娘だったようですが、彼女の美しさはバリ中でも評判になっているほど。その Bungan Natah を射止めたグス・ビムさんは、州知事であるお父さんによると「家では一番寡黙なおとなしいヤツ」とか。そして、今回めでたく 9 月 25 日：内外の VIP も参列した結婚式・・・の写真をみると！！Adu～さすがわれらが UBUD のブランコ氏。そんな結婚式で、そして、まわりの人々すべてがバリの正装なのに、な～んと彼のいでたちは、真っ赤なベレー帽に真っ赤なスカーフ、キリスト教の司祭が冬に着るようなハデハデ刺繍の上着、ズボンに革靴。要するにトレード・マークである、いつものブランコ氏のいでたちだったわけです。

ニュースの本筋から話題はそれてしまいましたが、ヘンなところに感心してしまった極通スタッフなのでした。



Mahadewi Blanco Sah Bergelar Jero Puduk

"MAAF, untuk kali ini saya belum mengizinkan putri saya, Mahadewi, menikah dengan IB Oka Surya Putra. Diah satu-satunya *bungan natah* saya sekarang." Kalimat itu diucapkan Don Antonio Blanco ketika "menolak" lamaran keluarga besar Griya Ambengan yang dipimpin IB Oka.

"Penolakan" itu terjadi setahun yang lalu ketika IB Oka, Gubernur Bali itu, *ngebet* ingin cepat-cepat menjadikan Mahadewi Blanco sebagai menantunya. Saat itu cinta IB Oka Surya Putra dan Mahadewi sedang mekar. Namun IB Oka yang menjadi *penglingsir* dan ayah Gus Bim — panggilan akrab IB Oka Surya Putra — bisa menerima karena Don Antonio Blanco masih menginginkan anaknya di rumah sebagai *bungan natah*. "Penolakan" itu, kata IB Oka, bukan berarti tidak direstui orang tua Mahadewi, melainkan lebih tepat disebut ditahan sebentar karena Don Antonio Blanco masih senang melihat anaknya di rumah. Apalagi saat itu Maha — panggilan anak terakhir Don Antonio Blanco ini — masih kuliah di Undiknas.

Kendati demikian, kata IB Oka, Antonio Blanco memberikan Gus Bim kebebasan bergaul dengan Mahadewi. "Itu dilakukan selama lima tahun dan keduanya sudah biasa berkunjung ke rumah masing-masing. Kan biasa, awalnya pasti ada basa-basi sedikit," ujarnya.

Begitu Mahadewi menyabet gelar sarjana ekonomi, lamaran orang tua Gus Bim kembali dilakukan sesuai aturan adat Bali. Pada 14 September lalu kedua keluarga sepakat untuk menikah-

Pak Oka Mantu

BAGI Gubernur Bali Prof. dr. Ida Bagus Oka, hari-hari terakhir bulan September ini punya makna khusus. Pada sasih Ketiga wuku Medangkungan ini, kepala daerah Bali itu menggelar hajjat, menikahkan putra sulungnya, Ida Bagus Oka Surya Putra.

Gurat-gurat kebahagiaan tergambar dari wajah Pak Oka ketika melaksanakan tahap demi tahap dari rangkaian upacara putranya. Minggu (22/9) lalu, Gus Bim — panggilan akrab putra Pak Oka itu — telah mempersunting putri bungsu maestro seni lukis berdarah Spanyol, Don Antonio Blanco, Mahadewi Blanco. Peminangan telah dilakukan pada Sabtu (24/9).

Upacara dan resepsi pernikahan akan dilaksanakan Rabu (25/9) atau Buda Pon wuku Medangkungan, hari ini, di Griya Ambengan, Banjar Ujung, Kesiman, Denpasar.

Pernikahan Gus Bim memang amat diharapkan keluarga Pak Oka. Betapa tidak, dari tujuh putra-putri Pak Oka, dua adik Gus Bim telah menikah. Bahkan, dari dua putra-putrinya itu Pak Oka telah dihidupi tiga orang cucu. Dua orang dari Ida Bagus Oka Indra Tenaya dan seorang dari Ida Ayu Oka Bulan Trisna.

Untuk ukuran seorang putra gubernur, upacara pernikahan Gus Bim ini bisa dibilang bermakna khusus pula. Tak seperti layaknya pernikahan yang biasanya dilaksanakan di hotel berbintang, rangkaian upacara dan resepsi diselenggarakan di griya di mana Pak Oka dilahirkan dan dibesarkan. "Semua ini sudah keputusan keluar-



Ida Bagus Oka Surya Putra dan Mahadewi Blanco

ga," ujar Pak Oka.

Apakah lokasi upacara yang tepatnya terletak di Jl. Turi 88 Denpasar itu akan mampu menampung membludaknya para undangan? Tidakkah justru akan merepotkan dalam menanganinya? Menjawab pertanyaan itu Pak Oka menyatakan, atas bantuan masyarakat justru penyelenggaraan di griya itu lebih bermakna.

Nilai pernikahan, menurutnya, bukan hanya diukur dari bagaimana dan di mana upacara dilaksanakan. "Tetapi dari ikhtikad baik dan didasari rasa cinta untuk meraih kebahagiaan," kilahnya.

Griya Ambengan, pada Rabu ini akan dipadati undangan. Menurut salah seorang keluarga Pak Oka, Ida Bagus Gede Sudarma, pada upacara pernikahan ini 1.000 lembar undangan disebarkan. Mereka yang diundang antara lain para Menteri Kabinet Pembangunan VI, beberapa dubes negara sahabat, pejabat pusat dan daerah, tokoh nasional dan daerah, serta kalangan masyarakat Bali. (kos)



FOTO BERSAMA - Kedua mempelai IB Oka Surya Putra-Mahadewi Blanco foto bersama dengan Hutomo Mandala Putra didampingi orangtua mempelai.

kan pasangan ini dan diizinkan *ngamet* mempelai putri ke Griya Ambengan. Kalau saja hari itu gagal lagi, tidak akan ada upacara *Manusa Yadnya* yang disebut *karya agung pawiwahan* yang berlangsung khidmat, Rabu (25/9) kemarin di Griya Ambengan, Bt.

(Bersambung ke Hal 15 Kol 4)

●BARIPOST/掲載記事

バリ島在住のニホンジンは今…？

皆さんもご存じだと思いますが、デンパサールには、日本領事館駐在官事務所というのがあります。インドネシア語で「Consulat Jepang」（コンスラット ジュパン）と呼びます。仕事や結婚、勉強、その他バリに長く滞在する日本人は、なるべく「在留届け」という届けを、そこに提出するようにすすめられます。この届けは、現住所や仕事先、日本の家族の連絡先などを書き込んで提出するもので、インドネシア側のビザとは関係なく、お金もかかりません。ちなみに、極通スタッフも届け出をしています。これは日本の外務省が海外で暮らす邦人の数などデータを調査するためと、外国で何か万一のことが起きたときの邦人保護のためだということです。そこでちょっと古いのですが、1995年現在のバリ州在留邦人のデータが発表されたので、ここにも載せてみようと思います。



領事館によると、これは届けだしている人の数であって、届けていない人も相当数いるらしく、このデータは正確ではないということ。表の中の「永住者」というのはインドネシアの人と結婚している方でしょうか。それにしても、4年前で総数600人近いということのも驚きですね。

バリ島観光が人気になればなるほど、多くの土地がバリ人以外の手に渡ってしまうし、日本人ばかりではなく、外国人居住者が増えるのはしかたないことだと思います。しかし、あるバリ人が寂しそうにポツリと言った「今のバリはもうバリ人のものではなくなってしまった」というコトバは、極通スタッフの胸を「ズキン」と痛ませました。

スカルノ前大統領の息子であり、歌手としても有名なグル・スカルノ・プトラが以前、お父さんの愛したバリ島の唄をつくって、インドネシアでヒットしたことがあります。それはこんなタイトルでした「Kembalikan Baliku」（私のバリを返して）。

極通スタッフが知る長期滞在者（結婚された方を含めて）の日本人の中には、皆それぞれ、バリを愛して、バリの人々といいい関係をつくろうとしている人々もたくさんいます。

バリ人の手からバリを奪うのではなく、私たちは仲良く、バリとお付き合いしていきたいものですね。

職業別

長期滞在者	305人
●民間企業関係者・同家族	218
●政府関係者・同家族	34
●留学生・研究者・教師・同家族	12
●自由業関係者・同家族	6
●その他	35
永住者	290人
合計	595人

地域別

●デンパサール市	204
●バドゥン県	291
●ギャンニャール県	69
●ブレレン県	21
●タバナン県	3
●カラングッサム県	4
●ヌガラ県	1
●バンリ県	2
合計	595人

在留邦人数の推移

年	長期滞在者	永住者	総数	増加率
1987	26	17	43	---
1988	37	41	78	81%
1989	86	60	146	87%
1990	156	65	221	51%
1991	173	90	263	19%
1992	120	122	242	-8%
1993	182	178	360	49%
1994	240	227	467	30%
1995	305	290	595	27%

DADONG (ダドン)

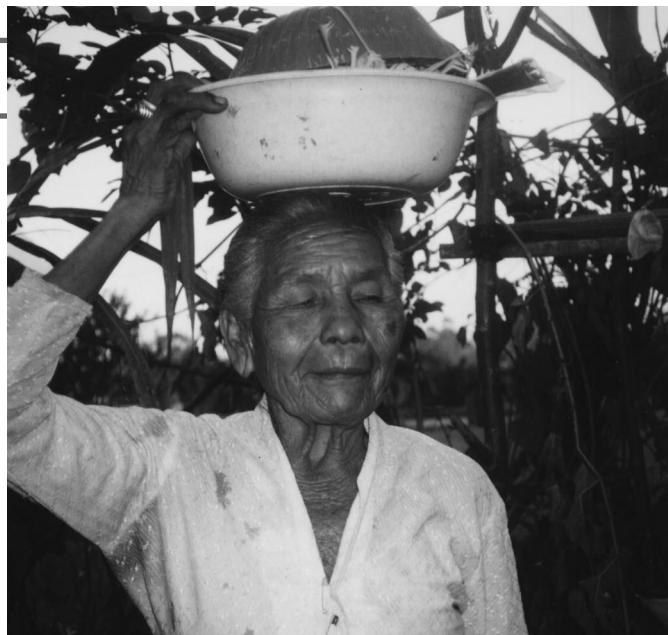
長期滞在者：I 氏

15日に一度巡ってくるカジャン・クリオンの日にダドンは、供物を持って私の家にやってくる。カジャン・クリオンの日は悪霊が徘徊すると言われているので、特別なお供え物を捧げるのである。たまに日を間違えて来ることもあるが、そんなことはお構いなしのダドンである。ダドンとはスードラ・カーストの“お婆ちゃん”の意味で、インドネシア語ではNENEKと言う。カーストに関係ない私は、お祈りしてもらうのは一向にかまわない。ダドンは耳が不自由のために言葉を話すことが出来ない。「あーあー」と言うダドンの発する言語と身振り手振りでコミュニケーションをとっている。ダドンは意味不明な言葉であれやこれやと私に命令する。線香や水を用意しろだの、いっしょにお祈りしろだのと結構うるさい。時々忙しいことのある私もこれに付き合わされることになる。

このダドンの正体は、Vol. 10のC・O・L・U・M・N “Ubudにもいた!! 幻の魔法使い”で紹介されたお婆ちゃん、由美さんの「椎間板ヘルニア」を直した魔法使いである。それからたくさんの友人がダドンのマッサージの世話になり、ムチウチ症や腰痛が治った友人もいて、魔法使いは相変わらず健在である。今回はその後のダドンの近況報告をすることにしよう。

最近、バリの素材をつかった紙漉きに凝っている私を見て、ダドンは手伝おうとして、薪用の廃材を1キロ離れたポンゴセカンの村から、頭にいっぱいおせて運んでくる。首が痛い、暑いと身振りで訴えながらも嬉しそうに一服する。特にダドンはグダン・ガラム・フィルターがお好みだ。汗びっしょりになっている姿に申し訳なく思い、お礼をするが少しのお金しか受け取ろうとしない。私の作業する姿を見て、何か納得するようにうなずき嬉しそうである。そんなことで最近カジャン・クリオン以外の日にも現れる。

洗濯物のシーツを見て、何やら言っている。どうやら、しわをのばせと言っているようだ。そして、紙漉きの準備の火を見て、これを使えと言う。何のことかわからず、ず〜と仕草を観察していると、どうもアイロンをかけると言っているようだ。それまで生半可な返事をしていた私はここでやっと理解することができた。ダドンのアイロンはスミ火をいれてするアイロンなのだ。バリ人は結構昔からスミ火を使ったアイロン（アイロンの本体の中に燃えてい



るスミを入れるだけの鉄製の大きな重いアイロン。今でも田舎へ行くと使っている家も多い。)で、着るものやサルンなどにこまめにアイロンをかける習慣がある。そんなものを使ったことのない私はダドンの言わんとしていることがすぐ理解できなかったのも無理はない。

そして、お金を少ししか受け取らない代わりに、小さなものを時々無心する。例えば、お供えものを運ぶのにちょうどいい大きさのかわいいピンク色の洗面器だの、ゴムゾウリだの、欲しそうに見ているのであげると大喜びだ。そして、次の日は、彼女の家でとれたパパイヤだのランブータンだのをお返しに持ってきてくれる。

今回ダドンのことを記事にしようと、ある日、写真を撮らせてもらうことにした。カメラを取り出して、ダドンにポーズをとってもらおう。すると彼女は何を思ったか、全身を硬直させてギュッと目をつぶってしまうのであった。出来上がった自分の写真を見て、何度も大声で笑っては照れていた。容姿といい、声といい、ちょっと迫力がありすぎて、初めて会った人はビビってしまうかもしれないが、ほんととは、こんなふうなうぶでかわいいダドンなのである。

PS：-- 由美からの追伸 --

Vol. 10で持病を治してもらったあとも、私はしばしば彼女にビジツ（マッサージ）をしてもらっています。朝起きて、なんとなく肩がこっていたり、「疲れがたまってるな」と思っていると、夕方必ずひよいと私の部屋に姿を見せるのは、やはりタダモノではありません。私が妊娠してお腹が大きくなってくるのをとても喜んでくれていたダドン。でも、誰が私の夫なのか、はっきりわかっていないらしく、今だに誤解されていると困るなあ。とにかく、私にとって彼女はスーパー・ダドン。できるだけ長生きしてほしいです。

オダラン体験

小田蘭丸

クニンガン（KUNINGAN）はウク歴の一年 210 日に一度巡ってくる。30 週のうちの 12 週目・KUNINGAN の Saniscara（土曜日）の Kliwon の日にあたる。この日はオダラン（寺院祭礼）が多い日で、あちこちの村が賑やかになる。今回紹介するクルンクンの街の東にあるパクサバリ（Paksabali）村でもこの日はオダランである。今回はそのパクサバリ村のオダランを紹介しよう。

この村のオダランは、村人たちが七台の神輿・ご神体をつぎ、プラの境内を猛烈な勢いで走り回っているうちにトランスしてしまうという、奇祭である。

私が到着した午後二時には、村の男衆がプラの前の広場にあるワソティランでバリ料理を作り終え、バナナの葉に盛り付けているところであった。プラの門に向かってバナナの葉がジュウタンの道のようにひかれてある。まもなくすると、その両側に四十人ほどの子供たちが座り込んだ。男衆が子供たちの前のバナナの葉に料理を運びはじめた。バナナの葉のジュウタンは食卓であったのだ。子供たちが元気の嬌声をあげながら食事を始めた。子供たちの食事が終わるとバナナの葉のジュウタンは片付けられ、変わって今度は男衆が四、五人が一組となり、あちこちに座り込み食事を始める。もちろん手で食べている。皿はやはりバナナの葉。一つのお皿（葉）からみんなで食べるというのが儀式でもあるようだ。

午後四時、バレガンジュールの賑やかな音が鳴り響いた。槍を持った男の子たちを先頭に、頭に供物をのせた女衆、上半身裸の男衆のバレガンジュール、そして、七台の神輿がやはり上半身裸の男衆によってかつがれ、途中、踊り子のように煌びやかに着飾った女の子が行列に加わって、村から一■ほど離れた川に向けて出発する。村は丘の上であり行列が急な坂を川へ降りるのが見渡せる。川原で儀式が行なわれ、男衆は川でマンディーをする。

午後六時、川で清められた神輿とその一行が、バレガンジュールと女衆の祈りの唄とともに、夕闇せまるプラに帰ってくる。プラの広場の入り口で儀式を済ますと女衆はプラの門の付近に集まり、お祈りの唄を唄いだす。そしてまもなく上半身裸の男衆が神輿をかついで勢いよく境内を右回りに廻りはじめる。バレガンジュールの音が一段と激しくなる。神輿は始め、二人でかついでいるが二度三度と廻っていくうちにかつぎてが増える。しまいには一つの神輿に二十人ほどが、まとわりつくようにかついでいる。あたりはもう真っ暗闇であるが、かつぎての幾人かがトランス状態に陥っているのがわかる。五回、六回と廻るうちに、広場の中程でぶつかりあう七台

の神輿が一同になり、まるでけんかのような状態で大騒ぎ。トランス状態の男の目はうつろになり、まるで魂を抜き取られたかのように茫然としている。クリスを高々と持ちあげている男は、生けにえのヒヨコを食いちぎっている。何周かを廻ったのち、神輿はブラの狭い割れ門めがけ突進しだした。トランスに入った男衆の何人かは、神輿から振り落とされる。ブラの門は神輿が入るにやっとの広さで、狭い割れ門から入りきれない男衆は、人の高さほどの階段から真逆さまに落下していく。それでも神輿は強引にブラに入れられる。それは壮絶な光景である。かつぎ手が全員がブラに入り終わり、バレガンジュールの音が止むと今までの喧騒が一瞬のうちに静寂とかわる。ブラの中ではトランス状態の男衆がプマンク(司祭)に聖水をかけてもらい、トランスから解き放たれる。オダランは終わり、私の興奮も解き放された。ここのブラだけでしか見られない、すさまじいオダランであった。



Illust:Fumio



ガムラン奏者、ワヤン（仮名）の独白

南部 弘

お久しぶりー。おっ、きょうはまた随分とお客さんが入ってんな。その辺の日本人、さっき俺たちの定期公演を見に来てた奴らだな。おっ、こっち見てる。制服に覚えがあるんだろうな。スマイルスマイルサービスサービスっ。

どっこいしょっと。ああ、しんど。ピンタンくれ、ピンタン。ちょー冷たい奴な。え、気前がいいってか？まあな、さっきコチョコでボロ儲けよ、ボロ儲け。ほら、俺たちの公演の日には、会場の横で必ずやってんじゃん、サイコロ賭博。レヨンの奴らはみんな好きでさー。俺はここんとこ負けっぱなしだったけど、一ヵ月分の負けを一気に逆転よ。ルールも良く知らない観光客がーか所に一万もはりこんでさー、ごっそりいただきってわけ。あそこでゴングがならなけりゃあ、もう一万はいけた筈だったんだけどな。ああ。開演前のゴングは、「ほーら、そろそろ始めっぞー、みんな集まれー。」ってな、集合の合図ってわけだ。開演の直前迄、メンバー達はみんな好き勝手にしてるよ。

例えば、カンティランのカデな、あいつの家は会場のすぐ近くじゃん、いつもゴングが鳴るか鳴らねえかってくらい、ギリギリになってから家を出てくるんだぜ。ところがさ、あいつ、今日は制服の色を間違えやがって、急いで着替えに戻ったんだけど開演に間に合わなくてな、結局、二曲目から参加したんだぜ。途中でちょろちょろステージに上がってきやがって、みっともねえたらありゃしねえ。

え？なんで間違えたかって？ほら、俺たち、制服を三種類もってんじゃん。一番新しいのはもったいないもんで、特別な時にしか着ないんだ。通常は古い二着の一週間おきのローテーションになるんだけど、今週の始めに、オランダ人の団体さんのチャーターがあってさ、そこで新しいのを着了訳よ。で、せっかくだから今週はそのままおニューでいこうって話になったんだけど、あいつは家でウパチャラがあってさ、忙しくてそんな時にいなかったわけだ。普通だったら連絡がいく筈だったんだが、何か手違いがあったらしくて、上手く伝わらなかったんだ。ま、運が悪かったって事で、ティダ・アパだな。

おっ、ピンタンちゃんがきたか。ゴボゴボゴボ。グビリグビリ。ぶはー、うめー。やっぱ、演奏後のビールが一番うめー。バリバリニシヤッ。おい、このクラブック、しけてんぞ。

そう言えば、さっきのステージで大ボケかましやがったアハウがいてな。いつもだったらパリスをやる順番だったんだけど、遅れて来たグスティの着替えが間に合わなくて、先に用意の出来ていたアグスのトペ

ン・ジャウーに変更になったんだ。ああ。当たり前だよ。ステージが始まる時間に踊り手が集合していないなんて事は。気が向かないと来ない踊り手もいるし、出番直前に着替えをすませてから来る奴もいるし。自分の出番が終わると、とっとと帰っちゃう奴も多いよ。こんな調子だから、その日は何を演奏するのか、なんて確実な事は、演奏する俺たちにもわかんねーよ。観光客は、入口で配ってるパンフレットを熱心に読んでたりするけど、あれはあてになんねーな。そうそう、あるガイドブックに、クビヤール・トロンボンの写真を、パリスと紹介してたりするのもあったけど、あれなんか、ろくに踊りも知らない奴が、たった一回の公演を撮影取材して、できあがった写真とパンフレットと見比べて、「最初がペンデットで、次がレゴンだから、これがこれで…」なんてやった結果だろうな。

とにかく、「ジャウーを先にやってくれー」って、楽屋から伝令がきたんだ。いや、俺たちはもうステージに出てるから、楽屋の状況がどうなってるかなんてわかんねーよ。ステージの袖から、衣装替えの手伝いをやってる下働きの奴が、客に判んねーよーに、小声で言うわけよ。それを聞いて、「ジャウーが先だ」「ジャウーをやるぞ」って、もう座っている演奏者間で耳うちしあったんだけど、ブマデのマデな、あいつ、最前列に座ってた日本人の女に気をとられてて、聴いてなくてさー。ほら、最初のクンダンだけじゃ、パリスもジャウーも区別できないじゃん。ジャーンって始まったら、あの馬鹿だけパリスやってんだよパリス！勿論、あいつがどんなに馬鹿だっつってもすぐに気がついたし、そのまま演奏は続けたけど、しゃれになんねーよ。

え？他の踊り手も用意が出来てなかったらどうするのかって？演奏曲やるんだよ。演奏曲。レパートリーなんかいくらだってあるからな。よく、オダランで奉納芸が始まる前にルランバタンなんか演奏すんじゃない？あれなんかは、「さあ、始まりますよ、みんないらっしやい。」てな感じの、ま、いわばアナウンスみたいなもんだ。ああいった曲は、長さをいくらでも変えられるからな、楽屋から、「準備ができたぞー」って言うまで、繰り返すわけだ。

ああ。あんまり踊り手をせかしたりして、着付けをいい加減にしたりすると、踊っている最中に衣装を留めてる安全ピンがとれたりして危ないからな。そうそう、こないだホテルのディナーショーで演奏した時に

な、楽屋とステージが離れているせいで、うまく伝令が伝わらなくてさ、焦って着替えをしたレゴンが、踊ってる最中にバラバラと安全ピンを落としていってさ、着付けが崩れる程度ならまだ良かったんだけど、衣装がとれていっちゃうんだよ。いやあ、あんときは俺たちもひやひやしたぜ。

ひやひやしたって言えば、先週のオダランで演奏した時の事だ。あぐらをかいてる俺のすぐ目の前を、何かがのそのそ横切っていくんで、何だ、と思って目を凝らして見たら、サソリなんだよサソリ！冗談じゃねーよ！サソリってのは、砂漠にしかいねえってわけじゃねえ。バリにも沢山いるぜ。勿論、毒はあるさ。でも演奏中だから動けねーし。ああ。演奏者ってのは、ステージの上では堂々としてなきゃいけねーんだ。俺は、やべーやべーと思いながら演奏を続けたんだけど、ちょっと目を離した隙に見失っちゃったんだ。でも、なんだか、演奏の合間に、カサカサといやな音がすぐ近くでするんだよな。いやあ、あん時は生きた心地がしなかったぜ。

ああ。結構、いろんな生き物がステージに上がってくるぜ。中でも厄介なのは、蟻だな。奴らの中でも、特に攻撃的な種類がいてな、こいつらが、たまたま俺の座る場所に行列をなしていると、始末が悪い。演奏中だろうと何だろうと、パンツの中にまで入ってきて、いろんなところを噛みやがるんだ。そりゃ、痛いわ気持ち悪いわむず痒いわ、たまねーよ。そうそう、この間もチャロナランやった時な、バロンが大きく身震いした拍子に、何かが、ポーンと飛んできたんだ。ヤモリだよヤモリ。あいつ、バロンの毛の中で落ちついてたんだろうが、いきなり踊り始めたんで、「ひえー、こりゃーたまらん」って逃げだしたんだな。まるでトビトカゲみたいな、見事なジャンプだったぜ。

ああ。動物だけじゃねー。ステージで演奏してると、面白い物が沢山見れるぜ。有名な美少女の踊り手が、くると客に背中を向けた瞬間に、口をなまずみたいに開けて鼻くそほじくってる姿とか、最前列に座って寝ている観光客の阿呆面とか。ああ。結構、多いぜ。いや、前に座っている奴ほど、寝ている奴は多いかもしれん。ほら、前の方の席ってのは、大事なお客さんの為に、あらかじめ用意してあったりするじゃん。自分で席を確保する努力をしてないから、その分、積極的に見ようって気持ちがないんだだろうな。

え？そんな事ねーよ。ねーてっば。……ま、ちょっとだけな。だって、考えてもみろよ。俺たち、ほとんど同じ事を毎週やってんだぜ？飽きねーほうがおかしーよ。目なんかつぶってたって演奏できるし、ちょっとだけ気分が乗らなくなっても、やってる事は同じだからな。普通の観光客になんかわかりやしねー。とは言っても、ここぞって時に息があってなきゃあ、演奏が台

無しになっちゃう。そのへんには、注意してるよ。でもな、時々、しょーもねー奴もいてな、覚えてっか？チャルンのアグン。あいつ、演奏中もしょっちゅう腕時計見てんだよ。別に時間を気にしたって、早く終わるわけじゃねえのにな。そんな調子で、ウガールの合図をろくに見てねーもんだから、しょっちゅうタイミングを外すんだ。まったく、しゃんとしろってんだよな、しゃんと。

いやいや、失敗がきっかけになって、いい結果が出る事だってあるぜ。いつだったかな、いつになく客が沢山入った時、最初の演奏曲でスリンのニョマンが調子に乗って、吹かんでもいい所をピーヒャラピーヒャラやりやがったんだ。みんな「やっペー」と思ったんだけど、そしたら案の定、クンダンのラカがすっげー顔して怒っててさ。「何を浮かれてやがんだ！」ってさ。いやあ、そこから先の緊張感っていったらなかったぜ。最初は、「もう一回、誰かがへたな事したら大変だー」が、その内、「ちくしょー、俺たちはこんなんじゃないんだぞー！」に変わって。いやいや、演奏の内容が変わったわけじゃないんだよ。なんつーか、全体のアンサンブルの切れの良さって言ったらいいか、音のうねりって言ったらいいか、もう、全然違うのよ。放っておいたって、体がぐいぐい曲に引っ張っていかれちゃうのよ。そうそう、ジワだよジワ。もう、すっげーんだ。ああ。滅多にある事じゃねーよ。もう、かんどーてきよ。でさ、でさ、気がついたら、客が泣いてるんだよ。後ろの方までは見えなかったけどさ、指で涙を拭く奴、Tシャツの袖で目頭を押さえるやつ、涙を拭ったハンカチでそのまま鼻をかむ奴。そんなんが沢山いるのよ。いやあ、それ見てて、演奏してて良かったな、って思ったよ、俺は。そいでさー、演奏終わったらさー、もう拍手の嵐よ。前の方に座ってたヨボヨボの婆あちゃんもさー、立ち上がって「ブラボーブラボー」って絶叫してんのよ。ステージ裏に退場してからもさー、メンバーもみんな興奮してて「サイコーサイコー」ってさー……………

この調子でワヤンは延々と喋り続け、二時間後にトイレで吐いて、その夜は『影武者』で寝た。勿論、追加のアラック三杯は、伝票についていない。

●お断り●

ここに登場した人物は、全て仮名です。ワヤンも特定の個人ではありません。又、ワヤンの演奏しているグループも、一つのグループに特定されません。但し、書かれている内容については、全くのフィクションってわけでもありません。

DARI JEPANG

テンペブーム到来か？

菅原 恵利子

この間、何気なく新聞を見ていたら「インドネシアのテンペ、O-157の増殖を抑制！」なんて記事が載っていた。その時は忙しくてクリッピングしなかったので、新聞記事のデータベースで検索をしてみたらケッコウあちこちで取り上げられていた。ざっと見出しだけでもご紹介しましょう！

- 001 [人模様] テンペの効用を力説 大阪市立大名大学教授、村田希久さん
90.10.17 東京本紙夕刊 5頁 総合
- 002 [ニッポンの食] 東南アジアの旅から／1 納豆ロード
91.02.21 東京本紙朝刊 19頁 家庭
- 003 [雑記帳] 秋田で“納豆サミット”
94.06.05 東京本紙朝刊 23頁 社会
- 004 インドネシアの大豆発酵食品「テンペ」で町おこし
製造・販売へー佐賀・白石町
95.04.09 東京本紙朝刊 19頁 家庭
- 005 常磐大学教授ら、“納豆文化”のルーツを探る
ー中国・雲南省へ調査ツアー／茨城
96.08.09 地方版 8頁 茨城
- ◆ 006 村田希久さん 納豆の国際シンポで活躍、テンペ普及を唱える（ひと）
85.07.27 朝刊 8頁 8総
- ◆ 007 河端信さん おからを活用して（ねーむかーど）
92.03.02 夕刊 8頁
- ◆ 008 ミャンマーからは「ふりかけ納豆」 10カ国集い大豆の祭典
94.06.02 朝刊 33頁 3社
- ◆ 009 納豆 ブームに乗り味を闘い 得です！福岡での粘り 【西部】
94.07.08 夕刊 3頁 らうんじ
- ◆ 010 インドネシアの“納豆”テンペを食べて 愛知学泉短大小玉教授／愛知
95.08.05 朝刊 愛知版
- ◆ 011 納豆ルーツ探し 糸引くように粘つく挑戦 本場水戸の学生ら
96.08.09 夕刊 12頁 2社

●＝読売新聞 ◆＝朝日新聞

ご存じの通り、テンペはバリでもよくおかずに出てくる納豆の固まりであります。テンペゴレンとピンタンビールの相性はバッチリだし、煮込み料理の中に入っていることもありますね。私はアレが大好きで、日本のとあるレストランでも入手可能なので、よくバリを思い出しつつテンペをゴレンして食していました。そのテンペが最近新聞やラジオやらで取り上げられてて、「成人病によい」とか「お肌にいい」とか「O-157菌増殖を抑制する」とか…やたら注目されてきたのです。

「ビタミン類が豊富で、抗コレステロール効果も大きい。地球環境や飢餓解決の面からも大豆発酵食品は未来型の食べ物じゃないかしら。野菜といっしょに炒（いた）めるとおいしいわよ」

【読売／001の記事より抜粋】

「東南アジアの納豆族を中心に世界十カ国約二百種の納豆菌を集め、遺伝子分析した九州大農学部原敏夫・助教授は「東南アジアに分布している納豆は、約一億六千万年前から約七千万年前に枝分かれしたものでルーツは雲南あたり」と語る。

その納豆、日本で最近、にわかに注目を集めている。成人病や老人病を防ぐ健康食品として、これまであまり納豆を口にしてこなかった関西地域でも納豆の売れ行きが急速に伸びている。さらには「地球とカラダにやさしい生き方をするために納豆を食べよう」と地球納豆倶楽部（藤本敏夫代表）という名の愉快的市民の集まりもできた。地球で増加する人口に必要な食糧を、食肉、つまり動物性タンパク質で補おうとすれば、飼料や穀物が膨大にいる。牛を飼うには牧草地がいるし、そのために緑や熱帯林が失われる。大豆で作られる納豆なら十分にタンパク質を補え、環境を破壊しない。納豆は「環境食」というわけだ。（つづく）」

【読売／002の記事より抜粋】

「テンペ菌は、カビの一種で納豆菌のような有用菌。インドネシアでは、大豆に菌を振りかけて発酵させたものが一般に「テンペ」と呼ばれ、伝統食品として普及している。栄養価も高く、便秘や成人病の予防効果もある。

小玉教授は、このテンペを日本でもっと普及させたいと活動している一人。会議では、日本の伝統料理としておから、いなりずしなどを紹介し、加えて、テンペコロッケ、テンペのおしずし、テンペみそ、テンペパンなども出品した。

「とにかくにおいもなく食べやすい。消化吸収もいい。病人食などにはもってこいなんですけど……」と小玉教授は言っている。同会議を機に、同短大を卒業した栄養士にも呼びかけ、テンペの復活を促していくという。」

【朝日／010の記事より抜粋】



…というわけで、おいしくて健康やら環境にまでいい「テンペ」。今後、日本でブームになって「カトキチのテンペゴレン」とか「コイケヤテンベチップス」とか「ハウスのテンペカレー」なんてのが、その辺のスーパーに並んだりしないかなあ…なんて夢見る今日この頃なのであります。



長期滞在者：O氏

バリ島を訪れるツーリストは必ずといってよいほど“KOMISI”の洗礼を受ける。インドネシア語の KOMISI (コミッション) は英語のコミッション (手数料) が語源のようである。特に日本からのバック・ツアーのツーリストは数々のコミッション攻撃をあとなになって気が付き、少なからずショックを受けるようだ。それは、日本での一般的な生活習慣の中では、あまり縁のないシステムだからである。“コミッション”といえは、日本の政府高官や大企業の特権である“賄賂”性の強いコミッションと勘違いしてしまいそうであるが、インドネシアでは“賄賂”はアンダー・マネー (袖の下) として“コミッション”と性質の違うものとして日常的にある。ここでいう“コミッション”はリベート (世話料) といったほうがわかりやすいかもしれない。ここインドネシアは、そして特にバリでは、一般市民の生活レベルまで、このコミッション・システムが大手を振ってまかり通っている。車やバイクのナンバー・プレートの数字の前にアルファベット文字が記載されてある。たとえばジャカルタ車は B、スラバヤは L、バンドンは D というように。これには特に意味はないようで、バリ島は DK の二文字である。これが語呂合わせの好きなインドネシア人には Daerah Komisi (コミッション地区) と呼ばれている。それほどまでに、バリのコミッション・システムは一般化されている。このバリの習慣に我々ツーリストは不満を抱いてしまうが、これを理解しないとバリでの生活がスムーズにいかないのも確かである。

プラマ社のシャトル・バスで UBUD に降り立つと、いきなり十数人の男たちに取り囲まれる。宿泊施設の客引きである。これが、うとうとしかったり、恐かったりで右手を振って通り過ぎるツーリストが多いが、この客引きもホテルやバンガローからコミッションをもらって生活をして

いて、決して悪い輩ではないので、泊まる場所が決まっていなかったら案内してもらっても大丈夫である。こんな客引きの中に、今夜のパフォーマンスの優秀なガムラン奏者がいたりする。

また、UBUD の道を歩いていると、あちこちから「踊り踊り」と声を掛けられるが、これも毎夜各会場で行なわれるパフォーマンスのチケットを売っている人々である。彼らもコミッションがもらえるようである。値段はふっかけられることはなく、正価なので気に入った人から買ってあげてください。

ツアーでつれていかれる、お土産屋やレストランもコミッションとしてツアー会社やガイドに支払われることが多い。病院でさえ患者を紹介するとコミッションがはいると聞く。こんな島であることを理解する必要がある。慣れない我々日本人には、良くない習慣と映るようだが、これは商習慣としてあることで、それについて怒ることはできない。それでこの島の経済が成り立ち、すべてのことがスムーズに運ぶわけでもあるのだ。

たとえば、こんなことがあった。日本人の友人 A 氏にバリ人とジョイントしてビジネスを始めたいと頼まれ、私は親しいバリ人男性のワヤン君を紹介した。A 氏はパートナーとしてワヤン君とやっていくことを決め、さっそく、ウッドカービングの仕人に出掛けた。たくさんの商品を選んだあといよいよ値段交渉の段、ワヤン君は私には関係がないというような顔をしてどこかへ消えてしまった。A 氏は英語で日本の商習慣の値段交渉をはじめますが、どうもあまり交渉がうまくいかないようで、A 氏はバリ人同志のほうがきつとうまくいくだろうと考え、ワヤン君を呼び交渉を頼む。しかし、ワヤン君は「値切ることが恥ずかしい」と言い出す。「如何に安く仕入るかがビジネスです、それを手伝うのがビジネス・パートナーです」と説明するが、どうも値段交渉は苦手のようなのである。しかたないので、納得できる線で交渉を成立させる。「さあ帰るぞ」とワヤン君を探すと、店の主人となにやら話をしている、そして、どうやら金銭を受け取っているようだ。A 氏は、それを見て頭に血が昇ったようだ。ビジネス・パートナーがバック・マージンを貰うとはなにごとだ。割り切れない気持ちで A 氏は私に相談にきた。「こんなバリ人とうまくビジネスがやっていけるだろうか?」。ワヤン君はあとで私に一言「金銭は断ったのだが、どうしても受け取って貰わないと気が納まらないというので、少しのお金を受け取った」という。彼らバリ人はゴトンロヨン (相互扶助) の精神で生きている。お客を紹介すること、そして、それに対してお礼をすることもゴトンロヨンのようである。その後、ワヤン君は A 氏から、さまざまな商習慣を学び、今では値段交渉も出来るようになったそうだ。

バリ島・最東端の旅

黄昏野ライダー

バリ島の東の端はカランガッサム県である。今回の旅はその東の端のそのまた東へ愛車に乗って、おっと失礼バイクを駆して出かけることにした。インドネシアの国民的バイクであるホンダ・アストリア 800CC が私の愛バイクである。

カランガッサム県の県庁所在地であるアンラプーラの市街地の入る手前を、豊富に湧く泉のある水の宮殿と呼ばれる“ティルトガンガ”に向けて北上する。ティルトガンガの泉で水浴びするのもよいが、今回はひとまず一路東へと旅を急ぐことにした。ティルトガンガを過ぎると急な登り坂にさしかかる。愛バイクのアクセルをいっぱい吹かし、いっきに登りきると眺めの良い峠にさしかかる。この峠からの景色は、右手に扇状に広がるライス・テラスの眺望が美しいことで有名だ。UBUD から約 2 時間のツーリングで痛くなったお尻にしばしの休息を与えよう。次の村はアバビである。アバビでこんな話を聞いたことがある。

昔々その昔、この美しいライス・テラスにたくさんの鳥が舞い降り、稲を食い荒らし、村人が困り果てたことがあったそうだ。村の長老は思案の末、一匹の大きなねずみに相談をしたそうです。ここが昔話ばっくていいですね。大きなねずみはある条件を出して鳥退治を約束しました。そしてある日、たくさんのねずみが田んぼに現われ、稲を食い荒らす鳥たちを追い払うことに成功しました。それから数年、鳥が田んぼを荒らすことはなく、村人は安心して平和な生活を過ごしていました。そんなある日、田んぼにたくさんのねずみが現われ、稲を荒らしているではありませんか。村人はこれはいったいどうしたことなのだろうかと悩み、そして、ある重大な事に気が付きました。それは昔、長老が大きなねずみにした約束です。その約束とは、ねずみの葬式をしてあげることでした。村人は急いでねずみのなきがらを集め、たくさんのなきがらは人型に棺に収められ、大勢の村人に担がれ、人間がすると同じように火葬されました。それからというもの、ねずみの被害もなく村は平和です。そんなわけで、ここアバビの村では十年に一度、ねずみの火葬式が行なわれるそうです。ねずみのほこらがこのライス・テラスのどこかに建っているという話も聞きます。訪れてみるのも面白いかも。しかしほこらは、よくチューいしなと見つからないそうです。

アバビの村を通り過ぎ、グヌン・アグンの山裾を縫うようにしてしばらく走ると、荒地の目立つ

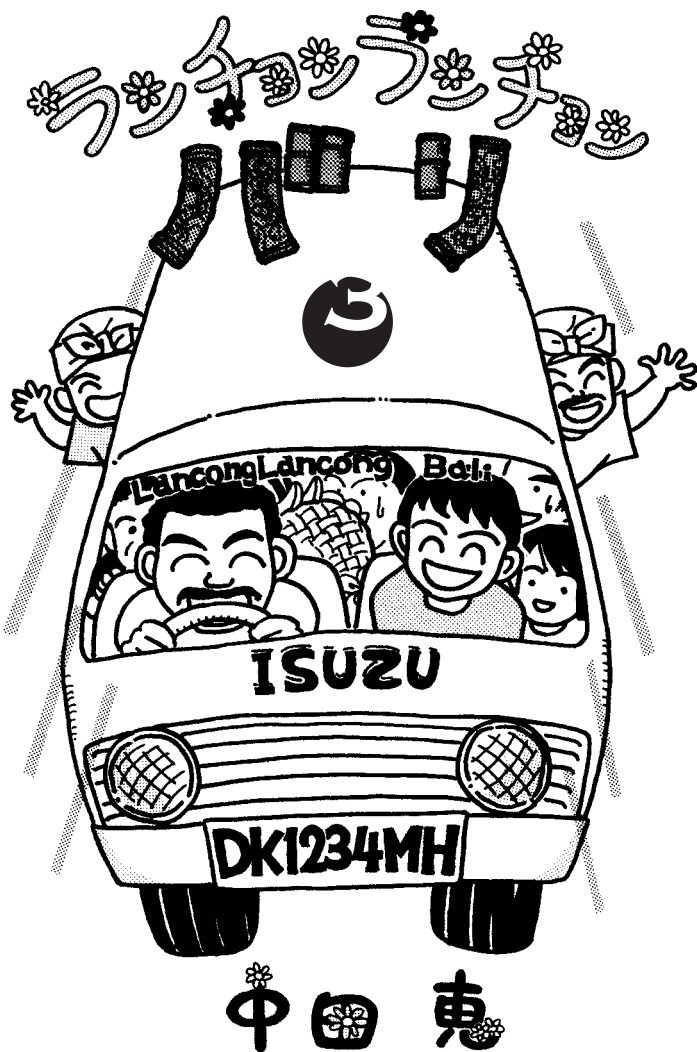
チュリック村に出る。バリ島の東部は岩の多い荒地が広がる。1930 年代、コリン・マックフィーが竹の楽器・アングルン聞くために訪れた村がチュリックである。アングルンは今でもオダランの時には演奏されるようだ。チュリック村の T 字路を右に折れ、漁村アメドに向かう。マックフィーは一夜を過ごすためアメドの海岸でテントを張ったそうである。アメドは今、ダイビング・ポイントとしてダイバーに人気がある。

たいていの地図は、ここアメドで道が途絶えている。が、道はさらに海岸線を辿るように続くのであった。ところどころに岩が崩れ落ち、川が横切る、起伏のある海岸道路は、右手に岩肌に見える山、左手に漁村か断崖絶壁の風景を見ながらのツーリング。風景に見惚れて崖から落ちないように要注意。最初の漁村を通り過ぎ、絶壁に登ったあたりから振り返って見る景色はお薦めのポイントである。アメンボのような型をした舟・ジュクンが並ぶ海岸の遥か彼方には、グヌン・アグンの山裾がなだらかにインド洋に落ちる。太陽はグヌン・アグンの向こうに沈み、グヌン・アグンをシルエットで浮かび上がらせる。青空が赤や紫、そしてオレンジ色と変化する夕焼けは、グラデーションの芸術である。

いくつかの村を通り過ぎ、今回の旅の目的地であるバリ島の最東端の村“Selang”に到着。アメド村から約 10Km、約 30 分。電気のまだ通っていないこの漁村は、満月の月明かり良し、月のない夜の満天の星空もまた格別。そして、朝日、朝焼けも絶景である。この素晴らしい海岸に一軒のバンガローがある。グッド・カルマ・バンガローはのんびりするにはもってこいの隠れ家である。あえて写真で紹介することをやめたのは、あなた自身の眼で、体で、バリ島最東端の旅を体験することをお薦めするからです。

◆チュリック村を抜け海岸線に出ると、グヌン・アグンの山裾はサバンナのような風景だ！





ぶん●中田恵 / いらすと●佐藤純子

● 10月16日

8時半、ギリアイル出発。重い荷物を持ってジューンに乗るのもだいぶ慣れた。朝の海は穏やか。滑るようにジューンは進み、9時前にはバングサールに到着。私にギリアイル行きを勧めたアンジャンツァーズのワフユが又、バングサールで客のチェックをしている。「おい、帰ってきたのか。チャンディ・ダサまでだったな。よしよし、バスは9時45分に出るからここで待ってろ」調子のいいやつだ。あんたの教えてくれた宿はお化けの出そうな、すごいトコだったんだよ、と言おうと思ったけど、言ってもしょうがないか、と諦め、ひどく暑い待合所でファンタを飲みながら待つ。

徒労に終わったロンボクへの旅も最後。バングサールから車で約2時間、ルンバルよりパダンバイ行きのフェリーに乗る。ぬかりなく港でナシ・ブンクスも買った。約4時間かかってフェリーはパダンバイに到着。

ここからはアンジャンのシャトルでチャンディ・ダサへ行くこととなる。ギリアイル行きのチケットを買う時に次の目的地を聞かれ、チャンディ・ダサと答えると当然のようにそこまでのシャトルも込みのチケットを買わされてしまったのだった。ベモで回る、という当初の予定とは少しずれるが、もう払ってしまったのだから、細かいことには目をつぶり、フランス人のグループと一緒にシャトルに乗り込む。ウブドを発ってから連日のハードスケジュールと、湿ったシャツと海水シャワー攻撃に、基本的にサバイバルに向いていない軟弱な体質。この時私はとにかく清潔な宿を求めている。今日こそは、きれいなシャツでゆっくり眠りたい。私の望みはそれだけ。誰が使ったかわからない、いつ替えたかわからないシャツは、もう勘弁して！って感じである。で、ものは試し…チャンディ・ダサではちょっとしたホテルという感じの宿へ行ってみる。「一番安い部屋、空いてる？」「空いてるよ。」ということで通された部屋はユニットの3階。道路に面しているのうるさいし、隣のコテージの屋根しか見えない。見晴らしは最悪であるが、そんなことはどうでもよい。ちゃんとしたベッドである。シャツも枕カバーも洗濯してある。バスタブがある。TVまで付いている。しかしひとつ問題があった。この部屋はもともとエアコンルームなのだが、エアコンが壊れていると言う。エアコンがなくても別に構わないのだが、エアコンルームでエアコンが使えない、というのはちょっと辛い。なんせ部屋は密閉状態

なのだ。蚊がはいらなくていいけど。私を部屋に案内してくれたそのフロントの男性は「6万」と言う。「でも、この部屋で扇風機がないのはちょっと辛いわ。それにどっちにせよ6万はととても払えない」「じゃあ5万5千にしてあげよう」うーん、それでも全然まだ辛い。やっぱり無理か…。「じゃあ、先にこの辺少し見てみるわ。気にいった所がなかったら戻って来るから」「幾らならいいんだ？」出た。『幾らならいいんだ』と言われるのが実は一番怖いよ。試されてるな、って感じである。本当は3万、と言いたいが、プール付きのホテルというところで、私もちょっと引いてしまった。で、恐る恐る「4万…なら」と言うと、今度はさすがに彼も少し引く。「でしょ、だからいいの。もっと他を当たってみるわ」「よーし4万でOK！」え？まさか…4万とは言っただけで実のところ5万位は覚悟していたのだけれど…ほんと？「でも、扇風機が…」とまだしつつここだわる私に「よーし、オフィスの扇風機を持ってきてあげよう」とまで言ってくれるのだ。フロントにいた女性が「何言ってるの、アンタ、そんな安い値段で」みたいなことをぐちぐち言っていたが、とにかく



■ Vol.14/15 に登場した、アグスとノニと子供達とカデ

く私は4万でプール付きのホテルの、エアコンの壊れた、扇風機付きの部屋に泊まることになったのである。ああ、ギリアイルに比べれば天国だ。それに何と荷物を部屋に入れて一服していると、オレンジジュースのウェルカム・ドリンクまで出てきてしまった。う…嬉しい。近くのワルンでナシ・ブックスを買って、スーパーでビンタンを買って、ホテルの部屋でTVを見ながら夕食。ちょっとヘビーな経験をする、その後すぐ何だかんだと理由をつけて自分を甘やかす。情けないばかりであるが、別に、無理してサバイバル続けるのが目的じゃなし、と言いつつ。少し疲れを癒していきましょ

● 10月17日

実に快適な夜であった。シーツは洗濯してある。扇風機はさびついているけれど、ちゃんと回って風を送ってくれる。海水ではないシャワー、しかもお湯！TVのカンフードラマを見て、10時前にぐっすり眠りに入ってしまった私である。そして今日はプールサイドでゆっくりとリゾート三昧。あー、ごめんなさい。(誰に謝っているのだろう、日本人だなあ) プールサイドで4時間位を過ごし、お腹がすいたので昨日のワルンへ行ってナシ・ブックス。ホテルのテラスで食べる。夕方、少し涼しくなったのを見計らって外へ出る。このあとしばらく田舎を回るのでその前に2万円両替。レートは少し悪くなっている。夕食は近くのレストランへ行く。ここは一応観光客向けの店のようで、メニューにはスパゲッティや魚のグリル物が載っていたりするのだが、作りがいかにも殺風景でレストランというよりどこから見てもルマ・マカンである。他の店が電飾で飾ったりそれっぽい雰囲気になっているのに比べ、あまりの殺風景さに勿論客は皆無である。しかしここは愛想のいいイブとその娘達でやっている店

である、と昨日散歩した時に私は見た。そして食事中にラキラキの“アナタノナマエハナデスカ”攻撃に合いたくない時は、イブのいるワルンカルマ・マカンに行くに限るのである。それにしてものがらんとした雰囲気は一瞬、失敗したかなという思いがよぎる。出てきた女の子にチキンヌードルスープを頼むとしばらくしてイブが出てきて、チキンがないのでフィッシュにしてくれと言う。で、特製のフィッシュヌードルスープにしてもらったのだが、これが何と4千ルピアもとられてしまった。しかし並々と野菜と魚がはいり、味付けも「チャベを使って

いいか」とイブがわざわざ確認に來ただけあって充分に辛い。美味しい。止められない。考えて見ればいつもバリで、何でこんなに汗かいてまでラーメン食べたんだか、と思うのだが、やめられないんだ、コレが…。イブに「バリには悪い人もいっぱいいるから、気をつけなさい。特にラキラキには気をつけるのよ」と言われる。ありがとう。気をつけます。泊まっているホテルのレストランでは今夜アンラブラから来たというガムラングループが演奏をしている。夜を彩るガムランの音色が、またバリの魅力のひとつだ。金属楽器の奏でる音の重なり、踊り子の妖しい視線。非日常の美しさが日常の中に存在している。「ダンスを見ないの？メグミ」食事を終えフロントを通る時に声をかけられた。昨日部屋に案内してくれたマデである。今日の午前中はフロントにいなかったの、おそらく彼は遅番なのであろう。「明日、私がチェックアウトする時、あなたここにいる？」「いいや、僕は夕方からなんだ。僕に会いたいんだったら家においでよ」そうじゃないんだってば！「私あなたにありがとうを言わなきゃ。ギリアイルですごいところに泊まってて良く寝られなかったの。ここ迄来るのに7時間かかったし、昨日は疲れててどうしても清潔なところで寝たかったの。あなたが部屋代を安くしてくれたからここに泊まれて、ゆうべはぐっすり休めたわ。本当にありがとう」とお礼を言う。ロンボク〜ギリアイルのサバイバルのショックもだいぶ癒えた。明日はまたベモに乗ることとしよう。ベッドに入った私の耳に、ガムランの音がまだ続いて聞こえていた…。

● 10月18日

朝食を終えホテルをチェックアウトする。マデはフロントにいなかったけれど、私の宿代は約束通り一泊4万であった。

ホテルを出たところでベモが通りかかる。“アンラブラ？”と確かめ飛び乗る。アンラブラでティルタ・ガンガ行きに

乗り換えたい、と運転手に伝える。アンラブラに入る直前にロピナ方面へのベモステーションがあるということだ。そこで乗り換えたらアンラブラ市内を見ることができないけれど、とりあえず宿のありそうなティルタ・ガンガへ先に行ってみよう。市内は明日、行けばいいや。乗り込んだ時は私の他に若い男の子が一人乗っているだけだったのに、又も途中から満配に乗客を乗せベモは走る。「ティルタ・ガンガへはここで乗換えだ」と運転手がベモを止める。ここまで六百と聞いていたので、千払ってベモを降りる。ところがここからがいけなかった。ベモから降りた私の所に寄ってきた男の子は、私が「ティルタ・ガンガ」と言うと、1 番早く出発するベモの所まで連れて行ってくれ「これに乗れ」と教えてくれたのだけれど、「ティルタ・ガンガまでは千だ」と言うのである。そんな筈はない。せいぜい二百か、三百に決まっている。「五百」と言っても「いいや千だ」と言い張って聞かない。ベモにはもう既にかなりの人が乗っている。多分私を乗せたら出発するのであろう。満配のベモに小さくなって乗り込んでいる人達を見たら、ここで押し問答する時間も申し訳ないような気持ちになってくる。それにこの子のこの確固とした態度！交渉する余地なし、というこのがんとした態度！なんだか逆に「おヌシなかなか」と思った私は、「ま、いーか、千たつて45 円位だし」という、いたって軟弱なモノの考え方で自分を納得させ、そのベモに乗ったのだった。思っていた通り私を乗せるとベモは発車。そしてティルタ・ガンガの前でベモは止まり、私一人降りる。こじんまりと数軒のワルン、2～3 軒のレストランがあるのみ。両替屋もあるがなんとレートは 19. 05、今までで最低、である。この付近にも清潔そうな宿が何軒かあるが、公園の中にある“ティルタ・アユ”に泊まれば、公園の入場料が免除されるという。どうせならそっちがいいかな、と公園入口の割門を入ろうとしたところで満面微笑みを浮かべた男の子に声をかけられる。「ハロー、どこに行くの」「ティルタ・アユの部屋を見たいんだけど」「じゃあ、僕が案内してあげるよ」と彼は先に立って歩き出した。宿は丁度前の客がチェックアウトしたところらしく、部屋の掃除中である。シーツを替えている。もうそれだけでここに泊まってもいい、と思ってしまう私だ。窓も全て格子になってちゃんと網戸もついている。WC もマンディールームもついている。なかなか清潔な部屋だし、朝食のメニューも豊富、ポットのお茶付きで 2 万 5 千、迷うこと無くここに決める。部屋の掃除がすむまでレストランでお茶を飲んで待つこととしたがその間、私を案内してくれた男の子グスティがティルタ・ガンガのことについて色々説明してくれる。それにしても、ティルタ・ガンガを見下ろすこのレストランの気持ちの良さならない。風が涼しい。沢山のバリ人が、プールで嬌声をあげて泳いでいるのが見える。グスティが明日アンラブラのパサールに連れていってくれる、と言う。(地元の人はアンラブラとは言わない。カランガッセム、の方が通りが

いいようだ)この子は、最初ティルタ・アユの従業員かと思ったのだけれど、どうやらそうではないらしい。よく、この手の観光地にいるガイド、だろうか。「公園の入口にたむろしている男に気をつけて。あれはジゴロだよ。」と言う。ご忠告ありがとう。でも私はイマイチあなたのこともまだ信用できないのですよ。一人旅はだから疲れる。気をつけなくてはいけないのは勿論だが、あまり疑心暗鬼になっても旅がつまらなくなる。どっちにせよ、自分で責任の取れる行動をしていけばいいのだ。明日朝 7 時に宿に迎えに来てもらうこととする。ところがこの子はそれから先、私が公園入口を通るとめざとく見付けて「どこ行くんだ!」と、本当にこういう感じで、正直コワイ。「えーと、あの、ちょっと歩きたいのですが…」とその度に私はまるでお伺いをたててそこを通らなくてはならなかった。近くのワルンで又してもナシ・ブンクスのランチ。プールの方でさっきから声が響いているのにつられ行ってみる。本当に緑と水の豊かなところだ。潤っている、という感じがする。からだの細胞のひとつひとつがこの空気に触れると生き返るようだ。少しぶらぶらと散歩する。このあたりは見応えのあるライステラスが多く、眺めを売りにしている簡素だが素敵な宿もいくつかあるようだ。しばらく歩くと坂の上にひときわ綺麗な建物を発見。坂の下に看板“Rice Field Coffee House”とある。でもこんなところ、一体客はいるのかしら、と思い坂を上れば、なんとびっくりしたことにその店は白人の客で大賑わい。まるでウブドの“Tropical View Cafe”のような一面水田を見渡すなんともどかな喫茶店。私はなんとここで冷えた白ワインなど頼んでしまったのである。さすがに宿代が 2 万 5 千だと余裕である。この余裕が、しかし長く続くものではないということを、その時は知る由もない私であった。

● 10月19日

かえるの聲がうるさい位響き渡るティルタ・ガンガの夜は、しかし結構快適で、明け方は寒い位。7 時に約束通りグスティが迎えに来る。公園の入口を出て待つことしばし、やってきたベモを止める。しかしこんな時間ベモに乗っているのはパサールに向うイブイブ達ばかり。それが皆一様に怖い顔をして私を見る。“なんだ、この日本人は?”って感じである。極通読者にはそんなことはないでしょうが、日本人観光客の中には、たまに品行よろしからぬ方々がいらっしゃるらしいです。そんなことをどれだけこころへんの人が知っているのか定かではないが、でもなんか肩身の狭い思いである。途中公務員らしき制服を来たババが乗ってきて何やらグスティと話している。バリ語なのでさっぱりわからない。まさか“いいカモ捕まえたね。日本人か”なんて言ってんじゃないだろうね。どうも居心地悪い。ところが、話の途中でグスティが私のことを“インドネシア語が出来る”と言ったらしい。いきなりベモに乗っていた人達の顔が変わる。さっきまで怖い顔をして私をじろじろ見

ていたイブが急に“あらまあ”って感じにこりとしたのだ。なんだか嬉しくなってしまう。パサールへ行く前にカンギン王宮を見せる、と言ってグスティは王宮前でベモを降り、私の分もベモ代を払ってくれた。うーん、好意なんだかなんなんだか…まだわからない。王宮の入場料は私に払えと言う。一人分かな、と思えばしっかり二人分取られてしまう。しかし王宮の中に一歩入れば…そこはまさに、ヴィキイ・バウム「バリ島物語」の世界!かつての王宮の華やかさは勿論とうに失われているけれど、かつてそうであっただろう、というように、残されて壁にかけられた写真の数々が、遥か彼方の時の流れを物語っているようだ。30年代の終りから40年代にかけて、オランダ支配の時代、中国人の使用人を使いながらここで暮らしていたラジャの生活にしばし思いをはせる。「ここが王様が何か特別な祈りを捧げる場所。これは水遊びをした池…」彼は又しても見事に説明する。王宮からパサールまでは歩いて4～5分程。大体パサールなんてどこも皆同じと言えば同じだけど、アンラプラのパサールでびっくりしたのは、生きた動物が沢山売られていること。鶏・あひるは勿論、これからサテになってしまうであろう元気のいい山羊さんや、ポトンされる為に足を棒にゆわえつけられた状態になっている豚さんたちが、ここには沢山いるのだ。でもわずか30cm位のゴブタもそうやってゆわえられているのには、つかいまいそうになってくるけれど。闘鶏用の鶏も売られていてババ達が群がっている。パサールを一通り案内してもらって見てまわり、お礼もかねてグスティをお茶に誘う。小綺麗なルマ・マカンに入り、かねてより疑問に思っていたことを質問。今更って感じだが、「グスティはガイドなの?」と聞けば「そうだよ。僕はティルタ・ガンガのガイドさ。ブサキのガイドは2万要求する。でもティルタ・ガンガのガイド料はひとり5千だ。それでももし嫌ならガイドはしないよ。強制じゃないんだ。」でも先に言ってよね。まるで宿の従業員のような顔をして私を案内し、勝手に色々説明し、それで「僕はガイドさ」と言われても…これ、やっぱり私私

わなければいけないのかなあ。幾らくらい払えばいいのだろう。5千がガイド料として、今日の分は別に請求されるかなあ、いづれにせよ1万払えばいいだろう。多過ぎるかなあ。それにしてもさっきからやけに疲れる、と思ったらこいつ英語で話しているのである。帰りのベモの中で“I live here.”と言う。咄嗟にわからない。“アイ・リブ・ヒア”が“I live here.”なのか“I leave here.”なのか、それとも“I love here.”なのか、わかるまでに5秒はかかる。“Saya tinggal di sini”と言ってくれた方が私にはずっとずっとわかるのだ。どうもこいつは、他に人がいると英語を使うようだ。しまいに“This is police”とか“This is school”とか“This is hospital”とかそんな事まで英語で説明する。そんな事説明してどうすると言うのだ。疲れるのだ!!!宿に戻って食事をしている間も帰ろうとしない。これはもうお金もらうまでいる気だな、と思った私は、折角だからこれからのコースについてベモの便・値段などを聞く。そして「2日間どうもありがとう。お礼に」と言ってお金を渡すと、なんと「あと5千」と言うのだ。「こんなにいっぱい教えてあげて、アンラプラまで連れていってあげたじゃないか」だと。げー!である。でも私はまだあと1日ここに泊まるのだ。今機嫌を損ねて、嫌がらせでもされたら…と、いきなり気弱になる。しかし5千がなかったのである。そしてわたしは結局2万、渡してしまったのだ。実際これはちょっと後悔している。2万はいくら何でも多過ぎた。こういう日本人がいるから後に続く日本人が又も高過ぎる料金を請求されるのだ。ごめんなさい!やっぱり1万と決めたら何と言われようと1万にしとけば良かったのだ。あー自己嫌悪!でももうあとの祭りで、今日私はワインどころかビールだって飲めなくなってしまった。チャンディ・ダサのイブに「ラキラキには気をつけるのよ」と言われていたというのに…。

夕方、少し気を取り直して散歩しようと外へ出る。公園を見下ろす小高い丘に朝夕人が登って行くのが見える。多分マンディシに行くのだろう。私もその丘に登ってみようと思

って歩いていくと、丘に登る坂の下で子供たちが遊んでいる。その時、横を通り抜けようとした私に一人の子供が言ったのだ…“Minta pen” …ペンちょうだい …バダンバイ、ギリ・アイルそしてここティルタ・ガンガ、“Minta pen”は3回目である。その子の後ろから、にこにこ笑って別の子供が私の方に寄って来る。何やら言っているが笑いながらなのでよく聞き取れない。「え、何?」3回位聞き返してようやくその子が言っていることがわかる。その子は「Minta uang」と言っていたのだ。にこにこ笑いな



■カランガッセムのPasarで。

がら…悪びれる風などまるでなく…。散歩する気が一気に失せる。引き返し、ティルタ・アユのレストランで、公園を眺めながら宿の男の子にお茶を頼む。子供たちがきゃっきゃと嬌声をあげてプールに飛び込んで遊んでいる。なんでなんだろう…。お金ちょうだい、って、今までもしそんなことを言われたら、私はいつでも“そんなこと言うもんじゃありません”って言っていた。でももしかしたらここは、何か違うのかもしれない。私がお金をあげないことの方が、もしかしたら傲慢な態度、なのかしら。でも…わからない。だとしたら、でも、それでいいのか…。お金をあげればいいのか…。一人で考えてたって、わかる筈がない。なんだかちょっと切なくなる…。誰か教えてくれないかな、でも質問の意味さえも理解されなかったりしたらどうしよう…。

お茶を飲んでいると、公園の中に、白と黄色の正装の人々がやって来た。宿の男の子に聞くと、「家族のセレモニーの為に聖水を取りにきた」人々だと言う。いつも鍵がかかっている奥の割門の中で聖水を頂く為のセレモニーが始まると言う。と言っても全部で20人位だろうか。プマクが前で何やら唱えている。人々はのんびりと、思い思いにお喋りなどしながら座っている。15分位たった頃お清めが始まり、ものの30分程でセレモニーは終り人々は帰っていった。後にはプマクと子供が一人残る。いきなり火の手があがる。「後片付けです。サジェンを燃やしているんですよ」火の後始末など全く何も気につけない様子で、プマクは割門に鍵をかけて行ってしまった。しばらくすると日は落ち、暗闇。何事もなかったようにもうすっかり煙も消えてしまっ、そうして又静かなティルタ・ガンの夜がやって来た。

● 10月20日

朝食を済ませ8時半、ティルタ・アユをチェックアウト。公園の入口を出ると、向かいのワルンでギターを弾いていた男の子が目ざとく見付け声をかけてくる。「どこへ行くんだ。トランスポートしてやろうか」「シガラジャまで行くのよ」「構わないよ」「だって私払えないもの。ベモに乗っていくからいいわ」そんな話をしているとバイクが1台止まる。「トランスポート?」「シガラジャよ」「OK、乗れ乗れ」誰が荷物を抱えてバイクの後ろに乗るかシガラジャまで。全くここの人達ときたら。「シガラジャ迄なら9時にバスが来るからそれに乗っていけばいいよ」とギターの男の子。「バスって…シャトルバス?」「違うよ。パブリック」このパブリックバスというのがどうもわからない。昨日宿の子もそんな事を言っていた。パブリックバスが9時に来ると…。それはベモとは違うの?9時までではあと30分近くある。ワルンでコピでも飲んで待つか…と思っていると「来た来た」という声。それは明らかに小さい身体のベモとは違う…中古乗合バス、とでも

言おうか…ちゃんと2人掛けの座席が左右についた立派な“バス”であった。車体も大きい。シャトルと比べれば大分疲れていることは否めないが、それでもやはりこれはしっかりした“長距離乗合バス”と言うべきなのだろう。小さな身体で走るベモに乗り慣れた身としては、なんだかとてつもない乗り物のように思えてしまう。「これ、シガラジャまで幾ら?」と急いでギターの男の子に聞く。「2千だよ」聞いてた値段と同じだ。車が大きくなるから値段も上がる、ってものでもないらしい。バスが止まる。「シガラジャまで」「乗れ」ひとつだけ席が空いている。良かった!荷物を抱えて乗り込む。「3千だぞ」車掌が言う。千上乗せしたな。でもシガラジャまで3千で行ければ恩の字である。バスは発車。すぐに何でこの席だけ空いていたのかわかった。暑いのである。直射日光をまともに浴びて、これじゃロンボク行きのフェリーの甲板だ。窓には日除けの為にカーテンがちゃんとついているのだが、そのカーテンを皆が自分の方へ引っ張った揚げ句カーテンが届かなくなってしまった席…それがこの席なのであった。しかし文句は言えまい。こういうトラブルを避けたいのなら、快適に移動する手段はいくらもあるのだ。それを選ばずに旅をしているのだから、こんなトラブルのひとつやふたつ…でも暑い…。気を紛らわそうと窓の外を眺めれば、バスはライステラスを抜けて走る。途中幾つかのちょっとした村を通り掛ければ、なかなか心そそられる風景にも出会う。パサールに並ぶワルン、いかにもおいしそうなナシ・チャンプールに出会えそうな…。SDの前ではバスに乗っている私を見つけた子供達が手を振ってくれたりする。やっぱりちょっと途中下車、ってことが出来ないのはこんな時辛い。バイクも車も運転出来ない悲しさ、だ。トランベンを越えると風景からはライステラスが消え、かわって茶色い平原が広がる。途中Les村というところにさしかかると、それはそれは美しい見事なベンジョールが続いている。白と黄色の人々がいる。オダランだ。“Pura Water Foll”滝寺、とでも言うのだろうか。割門、参道とも実に立派。ここに白と黄色の人々が溢れかえる様子はさぞかし見応えがあるだろう。しかしこんなところで途中下車する訳にもいかない。バスは進む。ところで先程から時々何か不思議な音がする。子供の玩具のラッパのようなプープーいう音。しばらく続いたかと思うと静かになり、又思い出したように音がする。その音の様子が少し変わって、ヒーヒーという音になった。うーん、これはどこかで聞いたことのある音…。音というか…これは、声…。そう、ガルンガンの前の日、足を棒に結わえられ、口を紐で結ばれて、庭に転がっている…これはバビだ!!バビの鳴声をBGMに、バスはシガラジャへ向けて進むのであった。3時間くらいで、バスは町はずれらしきベモステーションへ入

る。ガイドブックによると、アンラブラからのベモは“カンブンティンギベモステーション”というところに着く、と書いてある。そこからロビナ行きのベモが出るベモステーションまでは少しあるが、途中食事でもして歩けない距離ではないだろう、と思っていた。(あとから考えるにどうも歩ける距離ではなかった事は確かなようだが)ところが…どうも“カンブンティンギベモステーション”なんてどこにも書いてないのである。そして“バブリック・バス”に乗っていた唯一の外国人観光客である私がバスを降りると、ああもうどうして！あっという間に Sopir 達に取り囲まれてしまう。「どこ迄行くんだ」「ここからロビナ行きのベモに乗れる？」「チャーターだ。チャーターしろ」「カンブンティンギベモステーションはどこ？」「ここから5キロ先だ」長距離バスの終点は別のところ、ということなのだろうか。いづれにしても、ここがどこだか全くわからない。参った。こうしている間にも Sopir の人数は増え続ける。「ロビナまでベモはないぞ、チャーターなら1万だ」「ロビナまでチャーターしろ、ノンストップだ。」「チャーターはバグースだぞ」いつの間にか子供まで集まって来て私は一気に注目の的となってしまう。なんでこういうことになるんだ！多勢に無勢だ！「1万だ、1万でいいだろう、ほら車はあれだ」とうとうとう一人の Sopir が私の荷物を持って行こうとする。「ちょっと待ってよ」とは言ったものの本当にこれでは見知らぬところで降ろされたも同然だ。しばらく歩いてベモがひろえるのかひろえないのか全くわからない。大体このベモステーションを出てどっちの方角に歩いていけばシガラジャの街に着くのか、それさえもわからない。こうして考えている間にも人は増え続け私を中心に2重3重の輪が出来ている。ああ、これ以上私にどうしろと言うのだ！「わかった！全部ひっくるめて1万、ホテルを探すから気に入ったホテルが見付かるまで私の見たいというホテルを全部回ってくれたらロビナまでチャーターしましょう」ということで結局バス代3千にこのチャーター代1万で、私はシャトルと同じ(正確にはシャトルより500高い)料金を支払う羽目になったのだ。何やってんだ、全く。これも経験である。

ティルタ・ガンガとは雲泥の、暑い暑いロビナで3軒の宿を見、

3軒目の Rini という宿にチェックインしたのが12:30、疲れはしたが順調にきたものである。しかしそれにしてもロビナはさすがに暑い。やられてしまう暑さである。買い物に出てあっという間に暑さにやられる。しかし通り沿いのスーパーマーケットで素晴らしいものを発見。なんと国際電話のかけられる公衆電話があるではないか。早速テレホンカードを使って日本の母に電話。もう1週間位連絡してなかったので丁度良かった。Rini ホテルはプールこそないが、部屋もマンディールームも申し分ない広さ。お湯は出ないが、シャワーの水は海水ではない。天井で回るキパスが送ってくる風は快適で、夕食にホテルのレストランでヌードルスープを食べプレミアム tonic 割りを飲んだら異様に眠くなってしまった私は、なんとこの日、8時頃からぐっすり眠ってしまったのだった。

<つづく>



私の常宿

Pondok Manis

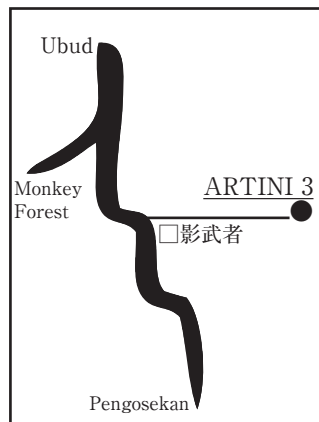
ARTINI 3 COTTAGES

きりん

影武者の縁側に座って夕涼み…。水田の向こうにアグン山が見えて、あーいい景色。…と思っていたら、その水田の真ん中に一本のアスファルト道路がズコーンと出来た。「あん、もお素敵なお眺めだったのに。」と文句を言っていたその道路の先に出来たのが、ここ「ARTINI 3」です。出来ちゃったモノはしょうがないので泊ってみました。そしたら「割といいんじゃない?ここ。」なんて思えたもんでご紹介します。

川に向かった傾斜地に2階建て／3階建てでプールを囲むように3つのコテージが建っています。室内は真白い壁が清潔で、窓がたくさんあって明るいつゆ気。お湯の出もバグース。プールが広くて、日当たりがよく、リッチな雰囲気。川から吹き上げてくる風が爽やかで、昼も夜もすごく静かです。客層は家族連れの西洋人が多く、難点といえばこのガキ共がプールサイドで騒ぐコトくらいかな。でもなぜかフランス語とかで騒いでも、な〜んか映画でも観てるみたいで「ああ、太陽がいっぱい、幸せだわあ。」となってしまうから不思議です。ちなみに私達は、あまりお勧めではない朝食付き、2週間、2人で一泊35ドルでした。ある程度の清潔さとプールとホットシャワーをお望みなら、一見の価値アリです。

ADDRESS: Jl. Raya Pongosekan, Ubud, Bali 80571
Phone: (0361)974147 Fax: (0361)975348



旅人一声 Pesan & Kesan

三村良樹

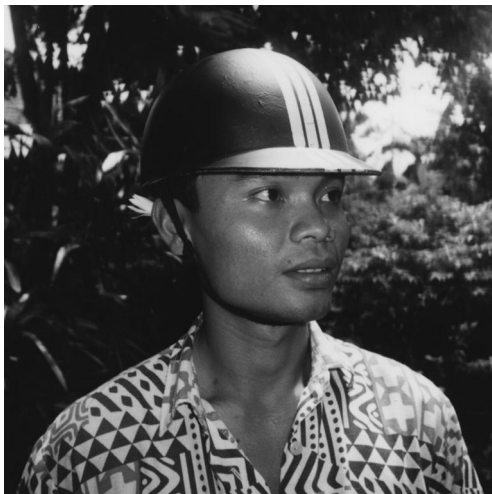
北部への道は坂が多い。今日はロビナ・ビーチ・ツアーだ。運転手はたいへんだ。ジェット・コースターのような道を猛スピードで駆けていく。右に左に、上に下に。左にはライス・テラスやコーヒー・プランテーション。遠くには海も見えた。バスはゼーゼーと息をきらしながらひたすら走る。人をよけ、バイクをかわす。“あっ”にわとりや犬が道をゆずらない。運転手は急ハンドルでかわす。ドイツ人、アメリカ人、日本人……。国際色豊かなツアー・バスはそれでも走る。前方から人の大群だ。バスは速度を落とす。祭りの行列だ。しばし見物する。また、バスは動きだす。左には、マンディをする人。屋台の物売りがトコトコ歩いている。パンジャールの温泉では、台湾人の団体が泳いでいた。そろそろ、あたりが暮れてきた。弱い光の街灯が見え始めた。「オー・ベリー・ナイス・ビュー」ドイツ人旅行者が声をあげる。バスを止め、全員カメラを持ち、ライス・テラスに横一列。なかなかバスに乗ろうとしない。さあ、あと一時間でウブドだ。バスは闇の中を疾走しはじめた。明日は、どこに行こうかなあ。

これ なあ〜んだ?
Apa itu?

近ごろバイクに乗っている
若者たちの間で、ツヤ消し
の黒に白い線の入ったヘル
メットが流行っているようだ。
いったいどんな理由からだろう
か?

ヒント=縦に三本線。時々一本や二
本線も見かけるが、これはバリエーションであっ
て主流ではない。私はてっきり、TVでコンバッ
ト(戦争物)でも放映して流行り真似をしている
のかと思ったが、どうやらそうではないらしい。
どうも彼らの大好きなスポーツに関係している
ようです。

解答=インドネシアの国民的スポーツはバド
ミントンであるが、熱狂的に好きなスポーツは
なんといってもサッカーではないだろうか。サッカーはインドネシアではセパツ・ボラと呼ばれ、
UBUDのあちこちのバンジャールにもチームがあり雑草の繁った広場で練習に励んでいる。試合に
は揃いのユニフォームで出場する。しかし、問題はサッカー・シューズである。靴はたいへん高価な物。
広場で見かける練習風景では、普通の運動靴がほとんどで、靴をはいていない選手も多い。そして、
そのサッカー・シューズの中でもっとも人気なのが黒に白い三本線のアディダスなのです。高価な
アディダスの靴が買えないからせめてヘルメットにマークをとという気持なののでしょうか。それとも
単にスポーティーでイカスからでしょうか。



Peliharalah Lingkungan UBUD

UBUD の環境を考える



バリにいろいろなスポーツ・ビジネスが進出してきている。そのほとんどが観光客目当てである。なにもバリまで来て、こんなスポーツをと思うものも数多い。そして、景観を損ねてまで持ち込んでほしくないものである。一大観光地としての役目を担うクタはしかたないとしても、こんな田舎にまでもというものもある。クタのバンジー・ジャンプは、まだそんなに景観を損ねたようには見られないのが救いだ。しかし、最近UBUDの近く Belatuh の Br: Blangsinga に OPEN したバンジー・ジャンプにはうんざりである。ここは、バリの若者のデイト・コースでもあり、少しではあるが観光客も立ち寄る美しい滝がある。この滝には私も何度か出掛けたことがある。マンディ場や石切り場の風景、そして川原が心を和ませてくれる。その景観の前に、巨大なクレーンのような鉄柱が異様な姿で聳えている。このスポーツ施設は一回 US\$45。一般のバリの人々には利用できない価格。それもバンジー・ジャンプだ。これほどバリに似合わないスポーツはない。第一これはスポーツではない。外国人が外国人のために作った施設としか考えられない。傲慢な外国人の仕業としか思えない。こうやって少しずつ景観が侵食されては、バリを愛する外国人として心が痛い。極通スタッフはいつもは穏やかですが、こういう「どうしても納得いかないモノ」に関しては断じて反対していきたいと思っています。皆さん、ここでバンジー・ジャンプをするのは絶対やめましょう。



その他のニュース

■勢揃いパロン 16 体！！

7月25日、マニス・ガルンガン：あちらこちらの村の辻でパロンのジャラン・ジャランを見かける。今日はそんな日である。中でも見応えのあるのがPUAKAN村に集まるパロンであろう。チャンプアンの北方角にあるスバリ村からさらに北のタロ村までの六つの村からパロン16体が一同に集合する。なんでも、今日はパロンの年に一度のミーティング(?)の日だそうだ。六つの村から、バレ・ガンジュールを先頭に老若男女たくさんの方々に付き添われてパロンの行列がやってくる。暑い昼中なのに全員が徒歩である。バイクや車を持っても、これは歩くことになっているそうだ。男たちはパロンを盗賊から守るため、腰にクリス(剣)をさしている。行列はまず、かなり古くからあると思われる寺院“Pura Jemang”でお祈りをすませたあと“Pura Puseh Puakan”でパロンを安置する。午後一時、16体のパロンが勢揃いした。これは壮観である。寺院のそばには大勢の人々が日陰を探して座り込み、昼食や涼をとっている。屋台も飲み物やスイカなどの喉を潤す物が多く売られている。賭に興ずる人々もいる。二時、プラのそばまで溢れている人々がいっせいに祈りを始める。祈りのあと、パロンはそれぞれの村へ帰る。スバリ村はもっとも遠い村で、朝八時に村を出発し、五時間をかけて到着し、帰りは五つのプラでお祈りをして廻り、なんと深夜二時に村に帰ったそうです。いかに信仰心が厚いかが感じられた今日のパロン勢揃いでした。



■UPACARA PANGEKEHAN

9月28日：ポンゴセカンのPr:MERTA SARIで神様をお迎えする儀式がありました。これはVol.12その他のニュースでパロンとランダを作るため1995年10月11日に境内の樹が切り取られたという記事で紹介しましたが、今日はその完成したパロンとランダを受け取りに、UBUDのプリ・サレンに村人総出で迎えに行きました。午後4時：プリでお祈りをすませたあと、供物を頭に載せた女性たちを先頭に二組のバレガンジュールが連れ添い、パロンとランダは村に帰って行きました。プラに安置されたパロンとランダに村人はお祈りをします。神様をお迎えする儀式は満月の夜、プラ・ダラム(死者の寺)の火葬場でおこなわれました。深夜1時から儀式は始まり、4時頃にクラウハン(神が憑依)したマンクがパロンとランダに入り、儀式は朝5時に終わったそうです。ちなみに、このようにパロンやランダの面に神さまを迎えて、ご神体(ススオナン)とする儀式のことをUPACARA PANGEKEHANというそうです。



■B・C・A移転！！

J.L.RAYA
UBUDにある
ノマド・レストラ
ンの横に、二階
建貸店舗の真ん
中でマネー・チェ
ンジの店と見間
違えてしまうほ
ど狭くて薄暗い
雰囲気営業し
ていたB・C・
A（バンク・セン
トラル・アジア）



UBUD支店は、この度、TEBESAYA方面に約200メー
トル行った地点に、二階建ての新築大型店舗で移転
OPENしました。店内も受け付けカウンターも日本の銀
行で見られるような近代的設備が揃い、業務もこころ
なしかスムーズに行なわれているようにみうけられます。
BCAキャッシュカードも年内無休で24時間体制、い
つでも引き出すことができ便利になりました。小さい村
のこの支店は、人口の流入増加が大きい要素となって、
利用者が急増し、それによって移転せざるをえなくな
ったと思われます。いかにUBUDがツーリズムの影響に
よって経済成長しているかが、この銀行の店舗の大型
化で計り知ることができますね。

■電話局移転！！

警察署の前にあった電話局がANDONGの交差点
をUBUDに向かってすぐ、BANK DUTAの正面に
新築OPENしました。かつては私設の電話サービス
との癒着が噂され、業務もズサンであったが、装い
も新たに新規一転顧客サービスに努めてほしいもの
です。これもUBUDの経済成長のバロメーターです
ね。

長期滞在者I氏のコメント「電話の普及の便利さは、
怠け者の私にとってはたいへん不便になることです。
必ず連絡がとれるということは、必ず約束を守らな
ければならない、そして時間も厳守になってくる。
それが私にとってはたいへん不便なのだ。電話がなけ
れば『雨が降っていて出掛けることができなかった』
と雨のせいにして遅刻したり、約束をうやむやにす
ることができた。この“うやむや”や“いいかげん”

そして“あいまい”が私は好きである。そして実際
に、スベダ・モートルを走らすことが出来ないくら
いの大雨だったり、大きな樹が倒れていたり、川が
氾濫して通行止めになる時がある。そんな無理をし
て時間厳守するほどの重大な約束はここではないよ
うな気がする。重要なことがたくさんあるとストレ
スがたまる、そうすると日本での生活と同じになっ
てしまう。私はここで、ストレスをためない生活を
しようと心に決めたのです。電話をはじめとする文
明の利器を自分がどれだけ持ってしまったかが、私
のUBUD生活の俗化ぐあいを知るバロメーターであ
るような気がします」。



■ちょっとしたバリ！！

これは、スカ・ゴン“グヌン・サリ”のプナボ（演
奏者）のバイクのスナップです。写真がちよっとわ
かりにくいですが、なんとガムランを演奏する
に使う“バンゲール”が二つハンドルの前の荷台に
乗っているではありませんか。ちょっとしたバリら
しさですね。



■これもバリ！！

クタのベモ・コーナー付近で見付けた、これが噂のマジック・マッシュルームのオムレツを作る前の姿です。これをかき混ぜてオムレツを作るわけですが、噂では、UBUDで見かける絵画の中に、どうも、マッシュを食べて描いたと思われる絵がいくつかあるそうです。昔、訪れた欧米の画家たちが「最後の楽園」と呼んだのも本来はここに由来したのではないかと噂好きな旅人が発言します。真相はいかに？

*筆者は写真を撮っただけで断じて食べてはいません。マジック・マッシュルームは違法です。気をつけてくださいね。



■新たにHAPPYカップル誕生！！

UBUDのメイン・ストリートとJL. ハヌマンのT字になっているところにあるカワイイ・ブティック「BULAN MADU」を手伝っている天野晴美さんが、8月吉日、めでたくご結婚されました。式はヌサドゥアの仲人さんの家で行なわれました。お相手はスマトラ出身のイワンさん。日本語をとってもきれいに話す好青年です。彼は五つ星のとあるホテルのマネージャーを務めるほどのエリートでもあります。晴美さん、イワンさんの末永いお幸せを心から祈っています。



うぶな人々 その16 ほりり



【年間購読申込み方法】

エアメールで、その旨手紙をください。宛先は「影の出版会：伊藤」、住所は巻頭のBALI本部です。料金は、4,000円。お返し申し込み用紙と送金方法をお知らせします。また、お急ぎの方は、郵便振替用紙の通信欄に年間購読希望と書いて送金してください。振替先口座：00190-6-573859「影の出版会」です。

ホームページを開設しました。一度訪問してみてください。

まだ、情報量も少なくとりあえずといった感じですが、おいおいウブドゥの情報などページを増やしゆくつもりです。

ブリージング(呼吸法)やニューエイジの話題、各種セラピーの紹介やワークショップなどの精神世界の情報を発信。またバリや台湾の旅の話なども掲載して、元気がでるページにしたいなと思っています。どなたかバリ関係のホームページを開いている方、リンクしましょう。

井上克己 (AIKO)

URL : <http://www.NetLaputa.or.jp/~breath/>

E-Mail: breath@kw.netlaputa.or.jp



Illust:Chizuru Ito

■ Nifty にバリ専門会議室 OPEN!

大手商用ネットワークである「NIFTY-Serve」にバリ専門の会議室がOPENした。当初、夏期限定の臨時会議室として設置されたが、評判が良くて常設化が決まったらしい。会員にはバリの強者達がズラッとそろい、とても濃ゆ〜い話が展開されている。IDを持ってる人は、>GO FASIA 7番会議室へレッツゴーだ!

●正式名称●

ワールド・フォーラム・アジア館 (FASIA)
MES(7) (特集) 南の楽園 バリ * Bali Club *

■ジェゴク・ツアー

バリに来たら一度は聴きたいジェゴク。あなたもこのツアーで経験したら、もうジェゴクの虜! 影武者では毎月一回中旬の日曜日にジェゴク・ツアーを行なっています。

★参加費: 一人US\$ 35(UBUDからのチャーターベモ代、弁当としてナシチャンプール、アクアがつきます。)

★行動予定: 2:30 影武者集合 / 6:00 スガラ到着 / 7:00 開演 / 10:00 終演 / 12:00 UBUD 着各ホテルまで送迎

■個人チャーター、予約受け付けます。

< SUAR AGUNG ARTIST >

新婚旅行の思い出に、その他記念日にスアール・アグンのチャーターはいかが? 花嫁花婿のジョゲツなんてサイコーな記念になることでしょう。

*ジェゴク・ム balan チャーター / US\$400

*ジェゴク・ム balan + ジョゲツ + プンブン / US\$450

*ジェゴク・ム balan + ジョゲツ + プンブン + 踊り / US\$500

*ジョゲツ + プンブン / US\$150

上記は1996年10月1日~1997年3月31日までの価格です。

予約お問い合わせは影武者/伊藤まで

アムゴンぱん



Terima Kasih



発行人：伊藤博史

編集：伊藤博史 / 佐藤由美 / えりり / 堀 祐一

エディトリアルデザイン：菅原恵利子

写真：堀 祐一 / 伊藤博史

カバーイラスト：細田 寛

極楽通信「UBUD」Vol. 16

1996 年 11 月 25 日発行

発行・販売：影の出版会

Hiroshi Ito: d/a Pak Wayan Karta Wigraha
Jl. Suweta No.16, Ubud. Bali,
80571, Indonesia tel.(0361)96134

©1996 影の出版会 禁無断掲載





影の出版会事務局

- BALI 本部 Hiroshi Ito: d/a Pak Wayan Karta Wigraha Jl.Suweta No.16,
Ubud. Bali, 80571, Indonesia tel.(0361)96134
- 日本連絡先 〒 106 東京都港区麻布台 3-4-4 Iikura Comfy Homes B-102
ポトマック株式会社内, tel.03(3583)0801 fax.03(3583)0803